

「戦後 70 年 中井英夫と尾崎左永子展」を開催中

～『虚無への供物』著者と女流歌人の交流を紹介～


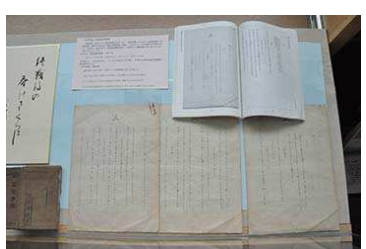

7月23日(木)まで豊島区立中央図書館(東池袋4-5-2ライズアリーナビル)5階にて「戦後70年 中井英夫と尾崎左永子展」が開催中だ。寺山修二をはじめ数多くの歌人を見出した戦後短歌の革新者であり、『虚無への供物』の作者としても知られる中井英夫と、長年の友人で歌人の尾崎左永子との交流を紹介する企画。昨年発見された中井英夫の未発表短歌の原稿や尾崎左永子から中井英夫へ宛てた直筆の手紙、また『虚無への供物』出版を祝う会の芳名帳など、貴重な資料を展示している。

中井英夫は1922年田端生まれ。戦時中は市谷の陸軍参謀本部に勤め、反戦反軍の戦中日記を書き続けた。戦後は日本短歌社『短歌研究』や角川書店『短歌』の編集長を勤め、葛原妙子・塚本邦雄・中城ふみ子・寺山修二・春日井建らを見出し育てた。1964年に塔晶夫(とうあきお)名義で『虚無への供物』を刊行し、ミステリーの枠を超えた「アンチ・ミステリー」の傑作として評価を得る。

『虚無への供物』は目白にある旧家を舞台とした長編ミステリー。日本を代表する長編推理小説の傑作であり、戦後文学の到達点の一つとして名高い。この小説に女探偵として登場する奈々村久生のモデルとなったのが、歌人で作家の尾崎左永子だ。1927年に豊島区巣鴨に生まれ、17歳で歌誌『歩道』に入会し佐藤佐太郎に師事。著作に『さるびあ街』『源氏の恋文』『かの子歌の子』『佐太郎秀歌私見』などがある。本年『佐太郎秀歌私見』により日本歌人クラブ大賞受賞。

今回の展示は中井英夫と尾崎左永子の交流にスポットを当てている。二人は長年の友人であり、中井英夫が『虚無への供物』を執筆する際には、尾崎左永子が奈々村久生の服装についてアイデアを提供した。尾崎左永子が「五月は着るものがない」と助言したことから、『虚無への供物』の終章58節を「五月は喪の季」と題し、新緑のなか灰色の服を着た奈々村久生を登場させたという。今回の展示でも尾崎左永子が送った直筆の手紙と女性の服装が描かれたイラストが展示され、作家同士の交流から名作が誕生した経緯が確認できる。

また『虚無への供物』出版を祝う会の芳名帳と昨年発見された未発表原稿「母と子のうた」も見逃せない。芳名帳には尾崎左永子が自身の名の代わりとして「奈々村久生」と署名しているほか、三島由紀夫らの名もある。「母と子のうた」の直筆原稿は亡くなった母への思慕を歌った大変貴重なもの。展示を担当した職員の田中さんは「滅多に見られない手書き原稿を見る機会ですので、是非来ていただきたいと思います。」と来場を呼びかけている。是非足を運んでいただき、作家同士の交流に触れるとともに作品もお読みいただきたい。

日 時	平成 27 年 6 月 27 日 (土)～7 月 23 日 (木) 平日:午前 10 時～午後 10 時 土・日・祝:午前 10 時～午後 6 時 *休館日 第 2 月曜第 4 金曜 (祝日の場合は第 3 金曜)
場 所	豊島区立中央図書館(東池袋 4-5-2 ライズアリーナビル 4・5 階)
写 真 *写真はメ ールで送り ます	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="319 1657 718 2016">  <p>展示の様子</p> </div> <div data-bbox="726 1657 1125 2016">  <p>中井英夫直筆原稿(画面下)</p> </div> <div data-bbox="1133 1657 1532 2016">  <p>尾崎左永子の手紙(画面右) 芳名帳(画面左)</p> </div> </div>
問 合 せ	豊島区立中央図書館